『古事記』独自の歴史像の解明

～ 断絶する仁徳皇統を 手厚く語る意図とは？ ～

山上　直

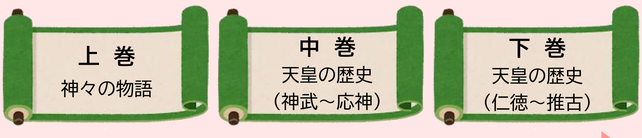
北海道大学 大学院 文学院
日本古典文化論研究室

未来社会のあるべきかたち

- **古典文学を通じて、文化的な知恵を継承 する**
- **地域アイデンティティの構築 に貢献する**
- **多様性を調和させる社会を築くヒント を得る**

そもそも『古事記』とは？

・約1300年前の712年に成立した、**現存する日本最古の歴史書**。
・**天武天皇の命** により、編纂が開始された。



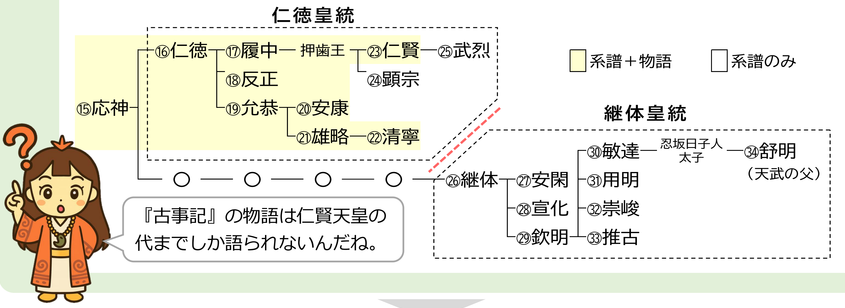
作品的構造を持ち、一つの論理に貫かれている（作品論的アプローチ）



ヌナカワヒメ

『古事記』下巻の謎 …… 断絶する仁徳皇統の語り方

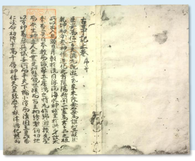
・**断絶する仁徳皇統** は、系譜記事に加えて物語を極めて手厚く語る。一方、天武天皇に繋がる **別系統の継体皇統** は、物語を一切語らず、系譜記事を載せるに留めている。



研究課題　なぜ『古事記』は仁徳皇統を手厚く語るのか？

研究の切り口　天津日継 あまつひつぎ ・御子 みこ ・言依し ことよし

・本研究では、仁徳皇統に関わる**『古事記』特有の語句**の文脈上の意義を、『古事記』全体の構造・論理から分析することで、この謎を解き明かしていく。



現存最古の写本 **真福寺本『古事記』**
（国立国会図書館ﾃﾞｼﾞﾀﾙｺﾚｸｼｮﾝ）

《研究の独創性・期待される成果》

仁徳皇統の断絶は、『日本書紀』の記述に基づく王朝交替説等の歴史学的な見方が主流で、『古事記』の解釈にも影響を与えてきた。しかし、中国的な政治思想で書かれた『日本書紀』の論理をそのまま『古事記』に適用するのは適切ではない。本研究では『古事記』独自の論理を精密に読み解くことで、『古事記』の仁徳皇統が持つ真の意義を解明する。

これまでの研究で、仁徳皇統の語られ方に軸を置いて『古事記』の作品的構造を包括的に分析したものはなく、本研究によって『古事記』という作品の新たな全体像と古代日本人の歴史意識を提示できるだろう。